

2015 年度統計力学 II 宿題 11 (7 月 2 日出題、7 月 9 日提出) 解答

担当 吉森 明

[問題 1.] (a) 周期的な境界条件で光子の  $D(\omega)$  と  $E$  を求めなさい。

(b) 異核 2 原子分子 1 個の分配関数が  $Z_1 = Z_G j_{rot} Z_S$  の時、1 分子あたりの比熱が  $C_V = C_{V,G} + C_{V,rot} + C_{V,S}$  となることを示しなさい。添字の  $G, rot, S$  は重心、回転、スピンを表す。

(c) 分子の慣性モーメントが  $I$  とすると、 $C_{V,rot}$  について低温の極限で温度  $T$  の依存性を表す式を求めなさい。 $x \ll 1$  で  $\ln(1+x) \simeq x$  を使い、 $\ell > 1$  は無視して良い。

[解答] (実際の解答にはここまで計算を丁寧に書かなくて良い。)

(a)  $D(\omega)$  の計算は、宿題 4 とほぼ同じように計算できる。波数空間を考えるのは他の普通の粒子と同じで、光の状態を波数空間の 1 点に対応させる。ただし、 $g = 2$  なので、波数空間の 1 点は 2 個の状態と対応している。

0 から  $\omega$  にある状態の数  $N(\omega)$  は、波数空間の球の中に入っている点の数から得られる。半径  $\omega/c$  の体積を点の間隔の 3 乗で割れば、 $N(\omega)$  を計算できる。点の間隔は  $2\pi/L$  だから

$$N(\omega) = \frac{4\pi}{3} \left(\frac{\omega}{c}\right)^3 \left(\frac{V}{8\pi^3}\right) \times 2 \quad (1)$$

したがって、

$$D(\omega) = \frac{dN(\omega)}{d\omega} = \frac{8\pi}{c^3} \omega^2 \left(\frac{V}{8\pi^3}\right) = \frac{V}{\pi^2 c^3} \omega^2 \quad (2)$$

ただし、 $\omega < 0$  で  $D(\omega) = 0$  となる。

$E$  は、

$$E = \int_{-\infty}^{\infty} b(\hbar\omega) \hbar\omega D(\omega) d\omega \quad (3)$$

ここで、 $b(\hbar\omega)$  はボース分布に  $\varepsilon = \hbar\omega$  を入れたもの。 $b(\hbar\omega)$  と  $D(\omega)$  の具体的な形を代入すると、

$$E = \int_0^{\infty} \frac{\hbar\omega}{\exp[\hbar\omega/k_B T] - 1} \frac{V\omega^2}{\pi^2 c^3} d\omega \quad (4)$$

$\hbar\omega/k_B T = x$  として変数変換すると、

$$= \frac{V(k_B T)^4}{\pi^2 c^3 \hbar^3} \int_0^\infty \frac{x^3 dx}{\exp[x] - 1} \quad (5)$$

ここで、

$$I = \int_0^\infty \frac{x^3 dx}{\exp[x] - 1} \quad (6)$$

とおけば、

$$E = \frac{V(k_B T)^4}{\pi^2 c^3 \hbar^3} I \quad (7)$$

と答えが求まる。 $I$  は、物理量によらない定数で、長岡<sup>\*1</sup>P278(A11) 式によれば、 $\pi^4/15$  の値になる。

(b) エネルギーと分配関数は次の関係式で結ばれる (統計力学 I 参照: 長岡 P74(3.17) 式、補習ノート<sup>\*2</sup>P10(21) 式)。

$$E = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_1 \quad (8)$$

ここで、 $\beta = 1/(k_B T)$  とした。 $Z_1 = Z_G j_{rot} Z_S$  だから

$$E = -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln(Z_G j_{rot} Z_S) \quad (9)$$

対数の公式から、

$$= -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_G - \frac{\partial}{\partial \beta} \ln j_{rot} - \frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_S \quad (10)$$

$\epsilon_G \equiv -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_G$ 、 $\epsilon_{rot} \equiv -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln j_{rot}$ 、 $\epsilon_S \equiv -\frac{\partial}{\partial \beta} \ln Z_S$  とすると、

$$= \epsilon_G + \epsilon_{rot} + \epsilon_S \quad (11)$$

<sup>\*1</sup> 岩波基礎物理学シリーズ 7 「統計力学」、長岡洋介 著、岩波書店

<sup>\*2</sup> <http://www.cmt.phys.kyushu-u.ac.jp/~A.Yoshimori/hoshu15.pdf>

これは、エネルギーが3つの自由度の寄与の和で書ける事を表している。

一方、比熱は、(長岡 P57(2.87) 式、補習ノート P9(13) 式)

$$C_v = \left( \frac{\partial E}{\partial T} \right)_V \quad (12)$$

(11) 式を代入すると、

$$= \frac{\partial \epsilon_G}{\partial T} + \frac{\partial \epsilon_{rot}}{\partial T} + \frac{\partial \epsilon_S}{\partial T} \quad (13)$$

$C_{VG} = \partial \epsilon_G / \partial T$ 、 $C_{Vrot} = \partial \epsilon_{rot} / \partial T$ 、 $C_{VS} = \partial \epsilon_S / \partial T$  とすれば、答えが示せる。

② 回転の分配関数は、授業で説明した通り、 $\Theta = \hbar^2 / (2Ik_B)$  とすると、

$$j_{rot}(T) = \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1) \exp[-l(l+1) \frac{\Theta}{T}] \quad (14)$$

ここで、 $T \ll \Theta$  を考えると、 $l$  の大きい項は無視できる (問題 2 参照)。

$l > 1$  を無視すると、

$$j_{rot}(T) = 1 + 3 \exp[-2 \frac{\Theta}{T}] \quad (15)$$

(8) 式から、

$$\epsilon_{rot} = - \frac{\partial}{\partial \beta} \ln j(T) \quad (16)$$

$$= - \frac{\partial}{\partial \beta} \ln \left( 1 + 3 \exp[-2 \frac{\Theta}{T}] \right) \quad (17)$$

$x \ll 1$  の時の公式  $\ln(1+x) = x + \dots$  から、

$$= - \frac{\partial}{\partial \beta} \left( 3 \exp[-2 \frac{\Theta}{T}] + \dots \right) \quad (18)$$

$$= - \frac{\partial}{\partial \beta} (3 \exp[-2\beta k_B \Theta] + \dots) \quad (19)$$

$$= 6k_B \Theta \exp[-2\beta k_B \Theta] + \dots \quad (20)$$

(12) 式から、

$$C_{V,rot} = \frac{\partial \epsilon_{rot}}{\partial T} \quad (21)$$

$$= \frac{\partial}{\partial T} (6k_B \Theta \exp[-2\beta k_B \Theta] + \dots) \quad (22)$$

$$= \frac{\partial}{\partial T} \left( 6k_B \Theta \exp\left[-2\frac{\Theta}{T}\right] + \dots \right) \quad (23)$$

$$= 6k_B \Theta \frac{2\Theta}{T^2} e^{-2\Theta/T} + \dots \quad (24)$$

[問題 2.] 異核 2 原子分子の  $j_{rot}$  について、低温で大きい  $l$  は無視できることを示せ。

[解答] (14) 式で  $T \ll \Theta$  を考える。

$$\frac{\Theta}{T} \gg 1 \text{ だから、} X \equiv \exp\left[-\frac{\Theta}{T}\right] \text{ は、小さい。つまり、} X \ll 1 \quad (25)$$

$$\exp\left[-l(l+1)\frac{\Theta}{T}\right] = X^{l(l+1)} \text{ で、今、} X \ll 1 \text{ だから、} \quad (26)$$

$$X^{l(l+1)} \text{ は、} \boxed{l \text{ が大きいほど小さい。}} \quad (27)$$

つまり、 $T \ll \Theta$  の時は、 $l$  の大きい項は無視できる。